

## 本財団設立の趣意書に憶う

この度、私は理事に選任され本財団の執行機関の一員としてのご縁を頂くことになった。改めて財団設立の趣意という一文を拝見したが、本財団の提唱者であり（株）オムロンの創業者である立石一真さんに30年余り前より公私にわたり親父のようにご指導頂いた頃を思い出した。当時、まだ現在のように機械とITとの融合が社会、経済に定着する前だったが、一真さんは将来必ずメカニズムとエレクトロニクスは一体となって機能するようになるとメカトロニクスの語も一般化されていない時代から今の世を見通しておられた。更に、その進歩の早さが産業革命時とは比較にならない程早い現代社会では、生き物である人間と最先端の機械との調和がとれなくなり、マンマシンインターフェイスの研究開発が極めて重要になって来ると言っておられた。一方、技術者、経営者として優れた実績を積まれる中で、身体障害者の社会参加、生活福祉にも極めて理解が深く熱心に対応された。身体障害者の職場としての「太陽の家」の工場を京都市内に作って頂いたが、その折の工場設備は機械に人を合わせて訓練するのではなく身障者の能力技能に機械を合わせるという方式を取られた。人にやさしいマンマシンインターフェイスの理念の一端を実現されていたのだらうと思う。更に、このような科学技術と人間に対する愛は、人類のすべてが最適情報を最も望ましい状態で入手でき、自分にふさわしい最適な仕事を安定して得られる社会が到来する。と一真さんの唱えられる「最適化社会」の理念に昇華して行ったのであらうと思う。一真さんは90歳を優に越える長寿を全うされたが、チャーチル会で油絵を画いたり、健康法として、柿葉茶、陶枕、温冷浴など自ら行うだけでなく私にも熱心に奨められた。科学技術と対局にあるような健康法は最先端の科学と生き物である人間は調和してこそ人間がより楽しく創造的な活動が出来るとの哲学であらう。

一真さんの生きざまと共に、その人生の理念が、今後の財団の活動を通して一層実現して行くことを願うものである。



財団法人 京都文化財団 理事長  
京都府京都文化博物館 館長  
京都府公立大学法人 理事長  
元 京都府知事

荒 卷 禎 一 (理事)